



此書書入ハ大炊御門殿諸大夫上田伊豫守政美
自筆ナリ政美ハ文化十癸酉正月再板ノ平安人物志ノ
書家ノ部ニ載ス字君山号蘭畹キ卷末ニ花押アリ
可珍重者ナリ

土左日記抄上

岡田眞
之藏書

〇曾之通長
以年上法守の
任りあり
土佐國ニあり
任りあり
四年十二月
一日あり
二年二月
三月あり
四月あり
五月あり
六月あり
七月あり
八月あり
九月あり
十月あり
十一月あり
十二月あり
〇曾之通長
以年上法守の
任りあり
土佐國ニあり
任りあり
四年十二月
一日あり
二年二月
三月あり
四月あり
五月あり
六月あり
七月あり
八月あり
九月あり
十月あり
十一月あり
十二月あり
〇曾之通長
以年上法守の
任りあり
土佐國ニあり
任りあり
四年十二月
一日あり
二年二月
三月あり
四月あり
五月あり
六月あり
七月あり
八月あり
九月あり
十月あり
十一月あり
十二月あり

つれとあれはよし

延喜式に花のけしきくう一ひつお

らぬ去りのりあつと... 延長八年... 承平

八年... のりあつと... 延喜式... けしき

と... 承平... のりあつと... 延喜式

... 承平... のりあつと... 延喜式

年乃二月十六日... 承平... のりあつと

う... のりあつと... 延喜式

すぎ... のりあつと... 延喜式

を... のりあつと... 延喜式

五年... のりあつと... 延喜式

或本奥書に... 延喜式

任国と... 延喜式

あり... 延喜式

とも... 延喜式

つ... 延喜式

又... 延喜式

諸国... 延喜式

お... 延喜式

正月... 延喜式

題号... 延喜式

本奥書... 延喜式

延喜式

巻一の初めのところの...
 目録に任まるといふ...
 紀行あり。又侍右...
 京極黄門乃志...
 是等は...
 ありゆり...

京極黄門奥書

又曆二年し未五月十三日し巳老病中 雖眼如盲
 不慮之外見紀行自筆本蓮華院宝藏 料紙白
 紙不并 高一尺一寸三分計 廣一尺七寸二分
 計紙也世六枚 表紙續白紙一枚端聊折返不并
 有外題。本末日記 貫之筆 其書様和奇非列行
 定行書之 聊有阙字并下無阙字而書後詞不
 堪感興自書寫之 昨今二ヶ月終功 桑門明靜
 紀行

延長八年任法光守 在國載五年六年之由 兼平
 四甲午五し未 歷三百一年 紙不朽損其字又解

明也

不讀得所_レ多_レ只_レ任_レ平書也

有朱平

妙秀院本與書

未花日記以貫之自筆本故將軍舊物希世之重宝也今度密之自小河幕府借出之

依或人數奇深切書之

古代假字猶蝌蚪未憲臨寫有魚魯平後見

察之而已

明應壬子仲秋假

亞槐藤原

紀氏系圖

新撰姓氏錄云紀久連石川久連同祖連内宿祢男角宿祢之後也

孝元天皇

房太忍作命

屋主忍男武雄心命

武内宿祢

木兔宿祢

真鳥宿祢

本道

日本紀云屋主忍男武雄心命詣紀伊國居于河備柏原要紀直連祖菟道房之女影媛生武内宿祢

筆行

貫之

時文

後撰集撰者内也

承和

古今集云御書所類

典侍 哥人六帖之作者

法中竟惠古今集乃說

紀貫之_{三下}紀文幹_{三下}乃

く必をたてて改替しつらうあまふ
延任しく又年或ハ六年有る事とせしむ
れいりくももる志をへしけゆら
國守任國乃あつて正税公廩をけし
さめし勘定も志をりつ既にお立ふ
ゆいし解由也とておし訓りハあり
乃らちをちをくせしを勘解官を勘解
由使としつ請國乃りし物をしつ
あれごとく帳をけし勘解由使
をりし帳を勘解由乃判官主典勘定
て自録をけりし勘解由乃長官次官よせ

長官次官を奏聞せしめし
ゆ使乃解由状をとりしつし
勘解由使乃奉旨察訓要抄し諸國乃参朝
四度解ふとせし年貢をせしんぐ
國司乃号あるをけりしつし
諸國乃参朝し近國乃ちハ一年一度参朝
中國乃ちハ二年一度つて遠國乃ちハ二年
一度朝参し勘定をけし
四度解し諸國乃りしつし
を年々中四季のうんぐ
土佐國延喜式主税式云正税公廩各二十万束

貞濁ハモロカ
トシテ注ラカ
サニ并レト諸テ
ミナモノガトア
レバ改ムクモア
ラ子ハサシマキ
○考ニケラシシ
ケテシヨリシ
文字ト同助字
ニヤラニ助字
ニ文字下ハ必
ハトウカニ
ラシハシ
ラハシ

わろいのがおき
シシモノナド云シト同シ詞シ
コトハテハ酔テ云カヒナリテ云コト
モハフカナリ
ちれこい。癡チ酔サケ人ハオカカシモリカカリ云シ
我乃ハモヨコ 酔サケ多シ。其ノモリカカリ云シ。
廿五日ハシテ館クワン酔サケ多シ。其ノモリカカリ云シ。
そこい共いハ。其土佐乃もろ敏ハヤシヤ紀氏ノリウヂをよび
よられて。酔サケ多シ。其ノモリカカリ云シ。
ふよや。酔サケ多シ。其ノモリカカリ云シ。
廿六日ハ。酔サケ多シ。其ノモリカカリ云シ。
ちりて。

同シ
鳥
モ
モ
モ
モ
モ
モ
モ
モ
モ
モ

あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり

あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり

あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり
あひま 御食ミケのすくさすきり

あひま 御食ミケのすくさすきり

あまのこをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに

生後五十五
廿五 五十四
有 家重 曾而
有 家重 曾而
有 家重 曾而
有 家重 曾而
有 家重 曾而

あまのこをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに

〇真淵の鹿見
寄 大津 十
ラヒテアル鹿子
水門トハコトナリ

あまのこをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに
まをいかにしりてあまのこをいかに

生瀨三ツロニア
 ハ口細ニテロニア
 ミラリガクミ名
 こモロモナニテ
 ガヒミタスガアツテ
 ヤウシニテヨミ
 出シタリ諸持
 トモヨリニテ
 セルタイヘリ

のあゝるゝに何とがなれり〜今の上
 依りれ見事し。さけあま〜酒人〜
 や。心あゝる〜
 かくわかれ〜
 ちらや〜
 かまき〜
 くらあ〜
 うれハ口細〜
 早下〜
 人〜
 あふ事〜

こととゆ〜
 人〜
 せ〜
 可〜
 とい〜
 又〜
 ころあ〜
 あり。あ〜
 い〜
 乃心〜

二
 三

志園云ソコハ
 テカキリト系
 ドノ詞ハ水ソコ
 ノニガキラス
 万葉ニアヤチ
 ソコニウラニ又
 野ノソキハソコ
 トイハモ皆ハテ
 カキリノイニハ
 天地ノソコハ
 天地ノハテカキリ
 ウラソコハコヒ
 約ナレハソコモ
 同語シ

と心へちりたればいふことごとく
 かりきり

紀氏けいしを甚感し
 此の心をいふことごとく
 をききしむるらん

うらむと志くぬい底井と志く
 う海乃字をよあり。木日向汪倫とあり。詩ニ
 桃花潭水深千尺不及汪倫送我情
 とふるふらちとありあつれと志く
 けいしをいふつれいふと志く
 ちのよむらと志く

通し
 昔ナリカサキハル豊ハツシニ
 志園云ソコハ
 万葉ニアヤチ
 ソコニウラニ又
 野ノソキハソコ
 トイハモ皆ハテ
 カキリノイニハ
 天地ノソコハ
 天地ノハテカキリ
 ウラソコハコヒ
 約ナレハソコモ
 同語シ

を吟じしむ。古今集ノ二首あり
 甲斐ノ根をよむあそびあり
 ありあせるとちの甲やま

甲斐上

とひきくありなれは...
ゆりかゝる

真淵云未季吟説ニワタツ三海ノ字ヲヨメリトアルイト誤シ
ワタトハ海ヲ渡ルト云フヨリ則ツワタトイヒテ海名トセリ山ヲ
コシテユク国ヲ越ノ国ト云ゴトクツハ天ツツラ国ツ神ナドノ
如ク助辞シ三ハモチノ約ニテ則ツ海ヲ持ニテ海ヲタモチ玉フ
神ナル古事記ニ見エテ明ラカシツラ轉シテ只海ノイニモ云ハ
海ノイシ

をのれしと云しハ助家^{タケノ}ノけ詞^ノをせゆり
かきりあくとをくもまよとくもやと俺あづよ
酒もちや母よのれ目と書ねといふも似たり
ころおま^をありある人^人こ^をおま^をありあ^をら^をし^をつ^をお^をま^をあ^をる^人
う^をも^をも^をま^をま^をあ^をら^をし^をつ^をお^をま^をあ^をる^人
し^をら^をよ^をあ^をれ^をど^をう^をひ^をら^をし^をま^をま^をあ^をる^人
よ^をら^をき^をハ^を似^を合^をし^をま^をま^をあ^をる^人唐人^{唐人}の陽^陽閑^閑
ま^をど^をう^をふ^をや^をし^をに^を餞^を別^をの^をれ^をよ^をう^をら^をひ^をら^をし^を古^古詩^詩
を^を吟^をじ^をま^をま^をし^をら^をひ^をら^をし^を右^右今^今集^集の^の二^二首^首の^のり^り
甲^甲斐^斐が^が根^根を^をま^をや^をあ^をも^をら^をう^をあ^をれ^をり^りの^のり^り
り^りあ^あせ^せる^るま^まや^やの^の甲^甲や^やま^まく^くひ^ひく^くね^ねを^をね^ねう^う

卷上

かまじくしりて人をいふものさかにはしめん
しめしむるのひひりきねをいふものさか
かまじくしりて人をいふものさかにはしめん
てんかまじくしりて人をいふものさかにはしめん
いふものさかにはしめんかまじくしりて人をいふ
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
よおのり人のいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
かまじくしりて人をいふものさかにはしめん
甲斐の東にふれはるる國をいふものさかにはしめん

蓬庫

かくりしりて人をいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
和名云蓬庫 布奈夜和太 舟上屋也
まじくしりて人をいふものさかにはしめん

蓬庫のまじくしりて人をいふものさかにはしめん
廣公善歌能令梁上塵起と杜子通曲り作は
る。ひひりきねをいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
まじくしりて人をいふものさかにはしめん
未窮青之技自謂盡之遂辞歸奏青弗止餞於
郊衢撫節悲歌聲振林木響遏行云辭譚乃謝

永反終身不敢言歸。みさるこも博物志
 傳にや。又さうりららる乃風吹ぬしと
 之れ朝乃首尾は條は風吹ぬて塵をみす
 うつらるるらるらる。さうらるらるらる
 さらおららららの子ららら。又けらららら
 めるくこらららららららら。言實
 乃すらららららららら。藤原のららら
 浦戸土佐をいづれすららら。新撰
 姓氏録を按ららら。氏三平代太史。も子諸見公之
 後胤也とららら。

北八日うららららら。大湊土佐國也。追尋ぬゆらら。千峯
 酒はあつたららら。酒にやけららら。ね
 くねらのこらら。お秀幸山口千峯
 うらららららら。彼らららららら。りららららら。れらら
 らら。山口氏は姓氏録に武内高祿のほらら。數百師
 北九日おらら。白散さけららら。りらら
 らららららら。ららら。白散ららら。

千峯

白散

を用ゆ。一献^コ了。先屠蘇を酒^リつれ^キき^ズ子^シ飲^ム
し。次に銀器^キり^テ今^ニ配膳^トは^ルは^ルよ^クす^ル人^ニ
せ^ル一日^ハ四^位。二日^ハ又^位。三日^ハ六^位。是^レの^後に^ハ
二^献了。神明白散を^スじ。三^献了。度^ノ瘴散を^供
じ。四^日記^リ。是^レの^後に^ハ二月^廿九^日付^シころ^ハ。小
乃^ハ内^ヲも^テし

元日^ノあ^リの^カら^シと^モわ^らり。 兼永五年正月元日也

元日^トハ三元^ノ八^日と^シり^テ事^ニ文^類聚^六。云^フ平
月^ヲ為^ス端^月。其^日為^ス上^日。亦^云云^フ三元^ノ。歳^ノ之^元。時^ノ之^元。
月^ノ之^元。玉燭^皇典^ニす。一^ノ名^ニ。三^ノ朝^ノ。と^シり
自散^をあ^るもの^トよ^めと^しり。蓬^庫と^シり

異本^ナフキナガサセ^ノ方^百百^シ

と^シり^テな^れば^ハさ^るり^トし^テる^ノガ^イに^ハさ^るり^トし^テる^ノ
り^つれ^キ江^ノの^まず^らり^ぬ。 終^ノ夜^ノ風^ノの^吹れ^キ終^ノ
き^テさ^るり^トし^テる^ノガ^イに^ハさ^るり^トし^テる^ノガ^イに^ハさ^るり^トし^テる^ノ
芋^ノと^シり^テ海^ノ帯^ト。坂^田好^附。 一本芋と疊も坂田也
い^つれ^バ乃^ハ一^ノ肋^ノ筋^ノ芋^ノり^あり^ぬ。 元^日に^ハ
用^ハれ^ルもの^ト延^喜式^大膳^下り^トも^ハ正^月最^勝王^經。蘇^子
云^フ供^養料^ト。芋^六合^滑海^藻二^兩二^分と^シり^ぬ。
と^シり^テ世^ノ諺^問答^一系^禪綱^流注^ニ。同^日齒^固と^シり^ぬ。
い^つれ^バも^らわ^りり^ぬ。い^つれ^バも^らわ^りり^ぬ。い^つれ^バも^らわ^りり^ぬ。

太^上北^上

こゝろのくハ小家の門をくし。ちうくめなハせし
日本書紀より九繩端出とも端出之繩ともくあり。神
ちうくこれ注連のくし和名より増かき繩讀と注
連同シ世諺同答云。穢の家居ハかかき封戸ありま
とりと。民戸とくし付れどむハ一町乃内を又文つ
に目りく門をそくハ八乃門あるくし。ちう中よ
穢の家居付れ門ありくきりありと。ちう門
乃ちちり松竹をくし付り。松ハ子年を焚く竹ハ
子代をちき。物されハ年の始の程よりくし付り
へし又ちうゆづり雲ハ涼山よりあうくく雪雲ありと
ちうよ物されハちうくくくくくくくくくくくくくくくく

たりや又云天照太神てけ戸をさしひし時あり
くめありとくし付れくハ甲付ちちちし。穢の家
居りひく事と。正月の神をいひまうし心あり
あしとくし。愚案。正月のくしハ年注神よりやち
波喝羅龍王乃むしとめ牛頭天秀乃妻婆利塞女のく
をくし。法明蓋蓋内傳よりくし。ちうくくく
をけく。後成恩寺殿纂疏云。九繩端出此又其義之解
其訓。繩者直之義。神道以直為本。尤者陽徳取清
明之義。端出者。綯索而不整。雪其所餘之芒端也。
是質朴而不飾之意。故以直清質為神明之徳。一
條繩而具此三徳也。即注連是也。ト部説曰くく

本記

わしをもちらそくを纏りてふもこのごとくを物とす
七ぬとわらわの天道ハナニと成義した繩よ
す心天道ハ友説と心しこいさうらうら
日本書紀云口女即鯨魚也。下部の説りハハハハ
ウリとそり。道徳彰ハ名者いせこいといふ事し
いれせり。節分乃夜いさうら大戦を好し
ウと。間鼻といふ鬼乃人をくらんとするそせき
術と。うー。塩囊抄と。いれれど日記りま
し乃うらとわれハ上古乃法ハいさうあさき
これ事文類聚と。桃符畫神。畫雞帖戸と。いれ
ら凶鬼をいせとわらわればとこいりや。

又節分の夜よめをうらと鬼をいせと事と世諺
同答と。禁中乃をよやいり。夜あり。灯をい
くともし。又殿上人も法教乃くまき。桃乃馬
さ乃矢もく射とふるあり。これとをさう
てまめうらと鬼をさうらと。のさうらとや
とゆり。追儼のり公事根源と。又鞍馬乃興僧正と。谷法
菩薩池乃名と。方丈乃元と。藍邊惣王と。そ
二頭乃鬼と。けり。いさうらと。田邊乃り
あうらと。をくらと。もれ別當。宇多乃帝と。奏し
くれハ。法家と。作せと。四十九家乃物と。り
て。方丈乃元を封と。こらと。斗れと。いりて

法家

志剛三三
馬のまゝあり
しなる備節
モノ酒がマダ
モノ酒ナド

思ひ極まり
日ヨリヨカラ
ハモシ風や波
ワレラフタ
ドムルニヤト
ビテイルヘル

〇名問オオホ
ト云ニ同
黙然
タバニ元ヨ
タ人ヲオホ
氏ネリシモ
ヒイル詞ニ
ソリ言ハク
九し如シモ
云ニモ同

鬼乃目をうらりよう 慥囊抄より 志剛三三
まど本歴より うらりや 世誘問答より 志剛三三
らど但坊道徳抄の慥囊乃説をも 志剛三三
されたり。下学集より 八百鬼集を 志剛三三
れされたり。躬恒家集より 志剛三三
鬼すゝも 志剛三三
志剛三三 日記の 志剛三三 可動
志剛三三 講師
家乃海州乃 志剛三三 又食物酒より 志剛三三

ワシきやうなれど
お美事より 八景連
しとえあはせ
くちやうハクや
おのり。くちやハ

志剛三三

先づ酒をさす
馬のまゝ
しるも満節
モノ酒がサマ
モノ酒ナド

見ゆ様さうなツツ
口ヨリウヨク
ハモシハヤ波ノ
ワレヲカニミト
ドムルニヤト思ヒ
ビニイヘル

口ヨリウヨク
ト云三同
黙然ツナ
タバニモヨ
タ人ヲホ人
氏ナリシモ
ヒイル詞ニ
ソ言ソヨク
ナル如クモ
云ニモ三同

鬼乃目をうらりより 檻裏抄りしきり 作りも
まじく本歴しけるわいせつ同答ふにさるるれぬ
らむと但如道極彩の檻裏乃説をも持へり
されたり。下学集一八百鬼集を云ふのりも
たされたり。躬恒家集も志すれぬのきん鬼を

大鏡第三 依理大戴らのてつ子の子そ任せ
るのあらぬるふとの国の事なる事あり
思ふとドのあれうあおもあしと風化
むしあそむすさしあありそく
しあおあおあやふのたああわりのし
しああああああああああああ
あああああああああああああ

三月おろしとらあること 風きれあはしが
びくちやあらんこらりあ
く舟なる月あふ風波の紀成をさす
四日ぐせふあえいぞとさす
あそむりたりやあああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ
あああああああああああああ

二七

真乃字あま...
 け...
 さ...
 ゆ...
 と...
 ぬ...
 と...
 と...
 を...
 と...
 六日...
 七日...
 八日...
 九日...
 十日...

国人...
 キノフノ知ク風波ヤマ子ガ同シ所ニ...

水鏡云弘仁二
 年正月七日...
 礼記春東郊...
 白馬...
 青雲...
 イヒ又青旗...

六日...
 七日...
 八日...
 九日...
 十日...
 十一日...
 十二日...
 十三日...
 十四日...
 十五日...
 十六日...
 十七日...
 十八日...
 十九日...
 二十日...

おきぢうのへう一おれいふこもわんげんしんしん
わんまふまふ

池の女のうへに浅草のうへに葉は腐くさしんしん
こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい
まわいりこいこい

あきまきい
あきまきい

寂可畏とまふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい
はまはまはまはまはまはまはまはまはまはま

池の女の事をいふくくくくくくくくくくくく
こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

イセテアヲキ袋ニ
イレテ葉ノ枝ニ
増鏡六云雲
推ト云ウガ
萩ノ枝ツク
鳥ヲ草木ノ
枝ニツク
調味記ハトニ
調味記ハトニ

長八郎

オシチハタイ

こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

篇一。赫晋氏之時。会哺而熙。鼓腹而遊。と云ふ
こいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

と云ふ。文選海賦云。於是鼓怒。溢浪揚浮。更相觸搏。飛
沫起濤。これいこいこいこいこいこいこいこい

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

人名イ
ヤビ名イ

ヲ枝ワルル
ヲモノセタリ
ヒキテハ
〇藤垣草
ワレライトワイ
モカヤコ
ヘテガ
リガ

破字是也。以銷送入也。枝系極廣乃。奇破毫。凡
をさふ妹。や。こま。へ。ご。ぐ。ら。あ。さ。さ。り。ご
あ。ま。い。う。の。ま。あ。ご。や。と。い。ち。ん。の。名。の。や
ぶ。り。ひ。を。長。た。う。ま。あ。ひ。物。と。し。て。
ひ。ひ。う。う。ま。ん。と。あ。よ。う。あ。あ。り。て。う。り。り
と。う。い。ひ。ご。あ。い。り。あ。あ。い。う。う。う。う。う。
て。よ。め。さ。う。い。か。あ。さ。い。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。と。愁。へ。み。音。通。と。れ。同。一。半。く。は。ら。さ。う
立。白。波。と。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
ゆ。い。は。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
あ。ん。ち。わ。ね。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

真淵云
アト云
テ、オ
モ愁
モ三
キト
テア
タカ
イヒ

波。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
も。て。う。う。の。う。り。う。う。う。う。う。う。う。う。
破。子。の。ま。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
は。ま。ま。立。白。波。と。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
又。う。う。の。ま。あ。あ。う。う。う。う。う。う。う。う。
こ。の。う。う。な。う。う。あ。り。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。
ま。の。へ。ま。ま。人。も。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
の。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
真淵云。イ。カ。リ。テ。ハ。物。ツ。ホ。ル。ヤ。ウ。シ。シ。シ。シ。シ。シ。シ。シ。シ。
い。せ。物。は。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

イヒ
モ三
キト
テア
タカ
イヒ

うのうたれいしやあらんいしあらんいしあらん
 わが子をうらんいし懐ひいしあらんいしあらん
 わらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 がらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 其れりあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 ちををらんいしあらんいしあらんいしあらん
 と云を此字に助詞をあまききよいしあらんいしあらん
 あらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 すらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 ちらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 あらんいしあらんいしあらんいしあらんいしあらん

此の字はあらん
 といふなり

れぬなり

又た此の字はあらんといふなり
 彼女のりけり

八日所りともありしあらんいしあらんいしあらん
 ひ月いしあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 八月のちあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 此の字はあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 平城天皇乃孫孫の保親乃子女の伊豆内親王
 也天福寺の奥に二代實録等をひききく京極東門
 くれんとすれあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 あんとすれあらんいしあらんいしあらんいしあらん
 月乃うらあらんいしあらんいしあらんいしあらん

此の字はあらん
 といふなり

郡行政等々。あきらめて、ハらにありあつた子に
とあや。そとぐ。姓氏録云。長谷部、送神速ハヤ月余ト
 世孫ト速見クニ余之後也。さしよらむ、あきらめて、ハらにありあつた子に
 氏乃治館ニ、あ首途一、あひ、目とちと、あきらめて、ハらにありあつた子に
 一、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
某人、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 乃り、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 す、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に

至二三里廻頭者數人猶在舊處云 余時漸去速走
ニ三三ニ里ニ廻ル頭ト者ノ數ノ人ト猶ト在ル舊ノ處ト云ク

影滅顧瞻不見 惻愴而ル去テ行ク到リ中ノ口ト浮ク舟ト而シテ過リ而シテ物ヲ沈ム
車、舟乃ゆき、トて、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 なくあきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 くれ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 づ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 くれ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 づ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 くれ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に
 づ、あきらめて、ハらにありあつた子に、あきらめて、ハらにありあつた子に

夜部の菜也
りらごを
除のり

がらふらをつまみあそびぬまのしづか
あつたおんといひぬ海乃乃様しるれぬ
くぢり舟子のあつたおんといひぬ
ともたふらすれぬ
も乃野菜のあつたおんといひぬ
はん親のあつたおんといひぬ
くわ手のあつたおんといひぬ
を銭のあつたおんといひぬ
こおのあつたおんといひぬ
かつやゆんやとつたおんといひぬ
ふ手のあつたおんといひぬ

同着
ツナ井八少
菜也昨夜
少妻義
下幸

がふとびりまのむとつたおんといひぬ
銭ことんとつたおんといひぬ
うまと船名の似つたおんといひぬ
お貴のあつたおんといひぬ
ハ貫侍夜切賒也のあつたおんといひぬ
た元のあつたおんといひぬ
あ元のあつたおんといひぬ
く元のあつたおんといひぬ
し元のあつたおんといひぬ

上五廿五

老女ヲ名メテ
云ハ老ノウツカ
ニソノタウメニ
專字ヲ用ヒテ
正チカサス

かゝるにししとまりにりり

あゝあやけしとまりにりり

より。まのこもれあゝあやけしとまりにりり

泊りつとまりにりり

おきまひとまりにりり

あゝあやけしとまりにりり

かきまひとまりにりり

へ専乃乃々々老女の

讀太字女平佐女又云太字女者毛波良之古語也今呼

老女為太字女

かゝるにりり

和名抄国郡
部云安藝郡
室津牟呂都

女三狐神とりり
とりり
のりり
り一人

十月

まのこもれあゝあやけしとまりにりり

十一日

あゝあやけしとまりにりり

あゝあやけしとまりにりり

あゝあやけしとまりにりり

室ムロツは土佐國安藝郡一れのいごとととて
 いひ食タビするといふ事ありし。九條殿遺誠曰先起
 衿スダ属星名字七遍ミツ 微音ヒコ次取鏡見面見曆トキ知ル者云ク次取
 楊枝向西洗手次誦佛名及可念尋常所ヲ尊重神社
 次記昨日事シ事多日中可記次服ウケ粥次梳頭カミ次日一度可
 次除手足甲ノツメ丑日除手足甲ノツメ次擇日沐浴ヨク五ヶ日一度又曰次
 有可出仕事シ服衣冠不可解緩ノボ下ノ暑ヒ。九條氏よりハ
 後人のいふといふともまじにいひぬふ事ありし也
 づいゝ去のせり。又礼記内則曰凡内外ノ鶏初鳴トキ咸
 盥漱衣服ヲ飲マシ枕簟ヲ灑掃シ室堂及庭布席各ニ従其
 事ニ。とるのいふといふともまじにいひぬふ事ありし也

いまをねにうとるよりさぬ
 いまの今こしは助定又乃の字ももそと依こ
 わりもこのころおのふをきこへまはなりとる
 いとりのをねたやうやあつたがらふも（右一死）
 わりもともあれ人こわや（右一死）ありける女ら
 ともんこのうをいふも。心寄すといふも（右一死）のあをいふ
 まつともあつた名（おま）もいふともあつた名もいふとも
 へりもやこへも（おま）
 身乃心の明紀氏乃息女（オマ）典侍（オマ）とくまらへり
 いももをいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 こるあれがらふともいふもいふもいふもいふもいふも

ひとくちをたれどいひなむとていふ所
はかどきしきしむらひをたれひつてぞ
きりしむらひのむらひのむらひをたれ

むらひのむらひのむらひのむらひのむらひ

くちをたれどいひなむとていふ所
はかどきしきしむらひをたれひつてぞ

きりしむらひのむらひのむらひのむらひをたれ

むらひのむらひのむらひのむらひのむらひ

むらひのむらひのむらひのむらひのむらひ

くちをたれどいひなむとていふ所
はかどきしきしむらひをたれひつてぞ
きりしむらひのむらひのむらひのむらひをたれ
むらひのむらひのむらひのむらひのむらひ

十二日あむらひ

くちをたれどいひなむとていふ所
はかどきしきしむらひをたれひつてぞ
きりしむらひのむらひのむらひのむらひをたれ
むらひのむらひのむらひのむらひのむらひ

ありてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり
けりてをうごちりてあゝぬをうごちりけりてをうごちり

又喜まざるは梅干といふ物を交へけりては 鮓也
とて師説よりいふとて作る物を押してわりのついで
しや為るきせんりのあるとて一舟ともいふなり
ありてはうしすありては鮓也は波玉のついで
とていふとては或るしやなり。こゝろありてはな
るさあゝぬとていふせは波玉のついでありては
人とていふとてはうしすありては鮓也は波玉のついで
よむとてありては波玉のついでありては波玉のついで
古今集よりいふとてはうしすありては鮓也は波玉のついで
ありてはうしすありては鮓也は波玉のついでありては
ありてはうしすありては鮓也は波玉のついでありては

去る上野

ありひをうごちるもあはぬをささぎよけつてせらる。
 けし居るを明くす。京極門奥に不續得而
 多と。好秀を興出。古代假字術。蜘蛛。末靈。
 名。乃。亦。や。但。志。わ。く。美。を。と。り。ゆ。ひ。の
 何。く。や。と。ひ。其。信。の。り。あ。ま。な。あ。と。と。れ。け。り。の。と。り
 する。物。を。す。ぐ。に。去。つ。て。ゆ。る。ゆ。や。こ。と。け。く。を
 ち。ら。け。て。と。り。あ。り。ゆ。く。ゆ。や。乃。は。ゆ。れ。い。と。り。と。り。徳。屋。の
 妻。乃。編。鰈。鮓。也。和。名。乃。貝。類。乃。部。よ。つ。と。と。七。寒。食。經。
 云。編。鰈。扁。着。二。音。和。名。爲。其。貌。似。鮓。而。大。者。也。う。ご。ち。あ。る
 昔。乃。秘。し。く。し。る。屋。の。り。は。ゆ。る。ゆ。を。ゆ。る。ゆ。を。ゆ。る
 あり。ひ。の。色。の。り。史。玉。乃。圓。ゆ。保。夜。交。鮓。と。り。ゆ
 貽。貝。尔。雅。注。貽。貝。一。名。黑。貝。和。名。伊。加。比

延喜式のありひ梅干といふ物を交へけく。鮓也
 と。師。説。よ。い。と。り。ゆ。る。物。を。押。し。ゆ。る。の。り。と
 一。也。爲。美。せん。の。り。あ。る。と。ゆ。一。也。ゆ。る。ゆ。の。り。の。り
 あり。ゆ。る。ゆ。の。り。あり。ひ。の。鮓。鮓。也。何。波。玉。の。物。ゆ
 一。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 幸。さ。あ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 人。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 よ。た。さ。あ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 古今集よ。い。ひ。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 あ。ま。れ。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り
 物。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り。と。り。ゆ。る。ゆ。の。り

去上平

此詩ハ詩人玉屑セツトテハ...
云高麗使過海有詩云。水鳥浮還没。雲斷復連。貫鳩
詐為相人。聯下句云。棹穿波底月。船厭水中天。麗
使嘉歎。父之自此後不言詩。きつてされたり。きつては
妙書本聞去とかり。きつてはきつてはきつては。

ありの月ツキのうらりウラリこいせコイセねれネレうらりウラリん
かつカツあせアセらラんンのノうらりウラリこいせコイセねれネレうらりウラリん
月ツキのうらりウラリこいせコイセねれネレうらりウラリん
これをきつてあせアセらラんンのノうらりウラリこいせコイセねれネレうらりウラリん
おせオセられラレらラんンのノうらりウラリこいせコイセねれネレうらりウラリん

われがよひま

久壁ハクベトツノ枕詞マクシハ存乃波ノナうらりウラリんンのノうらりウラリんン
大元オホノをキきキわワるルヤヤトト東波赤壁賦トウハセキト桂權ケイケン言コト
蘭ラン榮エイ轉ゼン空明クウメイ言コト沂シ流リウ光コウトトあアらラんンのノうらりウラリんン
氏ウヂハ東坡トウハよりむムらラんンのノうらりウラリんン人ヒト乃ノ先ノ地チうウらラんント
景ケイをキきキまマらラんン彼カノ今イマ序コトよりリト昇仙シヨウケンを論ロしシ人ヒト丸
をワりリとト文ブチ伴バン乃ノ山谷サンカク乃ノ序コトよりリ數カズ百ヒャク年ネントトきキ
てテ志シもモとト丸マルのノ名ナ譽ヨめメられラレるルトトいイふフのノうらりウラリんン
とトいイふフのノうらりウラリんン海ウミ上ノのノ浪ナミ心ココロとト物モノとトいイふフのノうらりウラリんン
とトいイふフのノうらりウラリんンとトいイふフのノうらりウラリんンとトいイふフのノうらりウラリんン
とトいイふフのノうらりウラリんンとトいイふフのノうらりウラリんンとトいイふフのノうらりウラリんン

工スハ怨ス
源氏物語
五ノスト
是ナリ

多クハ...

うらみ...

えび...

まね...

べし...

らん...

彼ニ...

小川
太郎
書之記

十九日
...

